

放射線診断科

I 行動目標

患者に不利益をもたらすことのないよう患者の環境を理解し、常に新しい知識を取り入れ検証し、主治医やコメディカルとのチームワークにより適切な医療を実践できること。

II 経験・習得すべき事項

- 1) 画像診断部門
単純X線写真、CT、MRI、RI、超音波、血管造影検査、消化管透視
- 2) インターベンショナルラジオロジー

各部位血管塞栓術	抗癌剤動注療法	動脈瘤 コイル塞栓術	バルーン閉塞下経静脈性逆行性胃静脈瘤塞栓術
血栓溶解療法	ステント留置術	下大静脈フィルター留置術	透視下・超音波下・CT下・MRI下穿刺術またはドレナージチューブ留置術

III 習熟目標

- 1) 画像診断部門
 - ・正常解剖に習熟すること。
 - ・頻度の高い疾患や急性疾患に習熟すること。
 - ・正常解剖の知識から異常所見を拾い上げ、論理的な思考の上から診断に至ることができること。
 - ・異常所見の信頼度や特異性などを考慮できること。
 - ・急性疾患について画像所見だけでなく症状も十分に考慮に入れて診断できること。
 - ・無駄なく確定診断に至るために各検査法の各疾患に対する有用性、適応についての知識を持つとともに、患者への侵襲を配慮すること。
- 2) インターベンショナルラジオロジー部門
 - ・血管造影ではセルジンガー法による穿刺、各血管の選択に必要なカテーテルの種類とガイドワイヤーを含めた操作法の知識と手技の習熟。各手技の適応と禁忌について知ること。
 - ・透視下、超音波下、CT下、MRI下穿刺術においてはモダリティーの特徴を知り、症例ごとに必要な機器を選択でき実践できること。これら手技の副作用とその対処について知ること。
 - ・透視下、CT下の手技中の患者・術者の放射線被曝を低減する方法を知り実践できること。

IV 当診療科における研修の特徴

1) 画像診断部門

放射線科医はCT、MRI、RI、マンモグラフィーの画像診断に従事している。画像診断は液晶モニターとレポーターシステムにより行われる。教育症例はサーバーから呼び出し、常に学習できる状態にある。

2) インターベンショナルラジオロジー部門

肝癌の患者が多く、肝動脈塞栓術の症例数が多い。消化管出血に対する緊急動脈塞栓術、バルーン閉塞下経静脈性逆行性胃静脈瘤塞栓術、部分的脾動脈塞栓術、血栓溶解術、動脈瘤コイル塞栓術、下大静脈フィルター留置術、気管支動脈塞栓術なども研修 2 年間に複数例を経験できる。